

研究プロジェクト成果報告書（特別研究）

研究課題 「発達支援体制をもつ幼保小接続プログラムの開発に関する実践的研究」

研究期間 平成28年度～平成29年度

研究代表者	上越教育大学	教授	瀬戸 健
研究組織	上越教育大学	准教授	河野麻沙美
	北海道教育大学釧路校	教授	阿部美穂子
	常葉大学	教授	堀井 啓幸

○ 各研究者の分担

- ・ 瀬戸 健（総括） 氷見市教育委員会、氷見市子育て支援課、氷見市海峰小学校、氷見市立阿尾保育園等との連絡調整、データ分析
- ・ 河野麻沙美（分析） 幼保小接続研修会における発話分析
- ・ 阿部美穂子（データ収集・分析）
保育園や小学校での活動から、幼児・児童の発達をとらえ、発達支援の効果等について検討する。
- ・ 堀井啓幸（分析） 幼保小接続について、組織論等の視点から検討する。

1 問題の所在

幼保小連携や幼保小接続が求められる原因の一つは、いわゆる小一プロブレムの解消である。保育園や幼稚園、認定こども園、あるいは家庭での養育等（以下、保育園等という）から小学校への進学に際して段差があり、それが子どもたちに不適応を起こす原因となっているという。そこで、現在、文部科学省によって推進されている接続プログラムは、接続期を設定し、保育園等では、アプローチ・カリキュラム、小学校ではスタート・カリキュラムを作成、実施して、なめらかな接続を実現しようとするものである。

しかし、一方で幼保小接続が浸透していかないという事実もある。これについて一前（2011）は、保育士や幼稚園教諭、小学校教諭等の直接子どもたちを指導している人たち（以下、教師たちという）のニーズと、接続カリキュラムが求めているものとの間に齟齬があるのではないかと推論する。つまり、アプローチ・カリキュラムやスタート・カリキュラムは、知的能力の接続を目指しているのに対し、教師たちたちが重視しているのは、その子が特別なニーズをもっているか、基本的な生活習慣をどのくらい身に付けているのか、傾聴する能力があるかなどであると指摘する。

そこで、本研究では、基本的な生活習慣の育成を中核として子どもの成長を見とろうとするN県A市の幼保小接続研修を研究対象とし、幼保の保育士、教員たちと小学校教員たちが互いに何を知りたいのか、何を伝えたいのかを通して、どんな接続を実現したいのかを追うこととした。

2 N県A市の保育士会は、何を小学校につなごうとしたのか

(1) 実践場面の設定

A市の保育士たちが取り上げたのは、見落とされがちな「登園時から所持品の始末まで」の一連の動きを対象とした。それは、毎日、全ての子どもが行う活動（デイリー・プログラム）であること、保育指針の「健康」領域に含まれる「衣服の着脱、排泄、食事」等がごく短い時間で終わるのに対して、「登園時から所持品の始末まで」は複合的な活動を多く含んでおり、一人一人の様々な成長が確かめやすいことなどの利点をもつ。加えて、子どもの創意や自主性が生きる自由遊びとは違い、例えば「箸の使い方」や「順番を守ること」のような、何度も繰り返して一人一人に着実に身につけさせるという内容であり、多くの保育士が参加する実践であっても評価のブレを少なく出来るという利点も指摘できる。登園時から所持品の始末までに「朝のあいさつ」「かばんの中の持ち物」「おたよりカード」「通園バック中の持ち物」「防止の始末」の5つの場面が設定された。

① スモールステップアップを図る評価項目の設定

もう一つの特徴は、一人一人の状況をとらえる評価項目の作成と活用である。本実践には、A市内にある約半数の7保育園、55名の保育士、0歳から5歳児までの園児518名がかかわっている。この全ての園児一人一人の成長を一人一人の保育士が確かにとらえるには、評価項目の設定と、評価内容の共通理解が欠かせない。評価項目の設定には、各保育園から選ばれた10名の保育士（以下、推進委員という）があたった。まず、各推進委員が担当する子どもの活動を観察し、それを推進委員会に持ち寄る。さらに検討を加え、一つの評価項目へと整理していったのである。

表の作成にあたっては 図1 スモールステップアップを図るための評価項目作成手順
小学校の「ことばの教室」 —かばんの中の持ち物始末を例に—

が使っている言葉の発達のスモールステップ表を参考とした。作成手順は、「かばんの中の持ち物の始末」では、図1のようである。左が観察結果、右が作成された全年齢共通の評価項目である。さらに、保育指針との関連を図り「目指す子どもの姿」として加え整備した。「朝のあいさつ」では、表1のようになった。

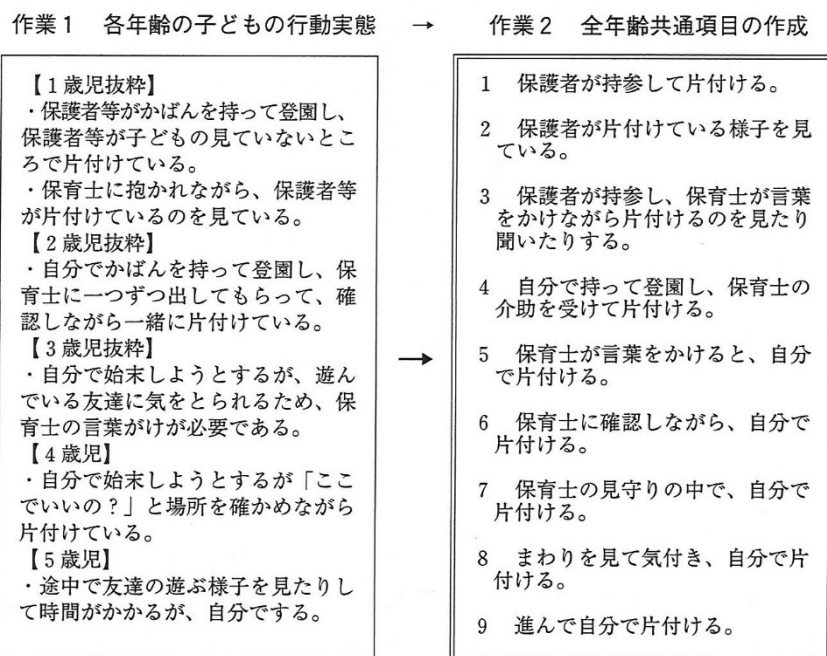


表1 「朝のあいさつ」における目指す姿と、スモールステップアップ項目

項目	目指す子どもの姿	スモールステップアップ項目
<p>●クラスに入る。 *自分からあいさつをしてクラスに入る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 親しみを込めて、言葉としぐさであいさつをする。(言葉) ・ 簡単な報告をしたり、出来事に触れたりして、保育士や友だちとの親しみを深める。(人間関係) 	<p>●朝のあいさつ</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 保育士が言葉をかけると、目線に向ける。 2 保育士が言葉をかけると、笑顔を返すなど表情で応えようとする。 3 保育士が言葉をかけると、お辞儀をするなど動作で応える。 4 保育士が言葉をかけると、同じように発声で応じる。 5 自分からあいさつをしてクラスに入る。 6 自分からあいさつをしてクラスに入り、保育士や友だちと楽しく会話をする。

(2) 取り組みの結果と考察

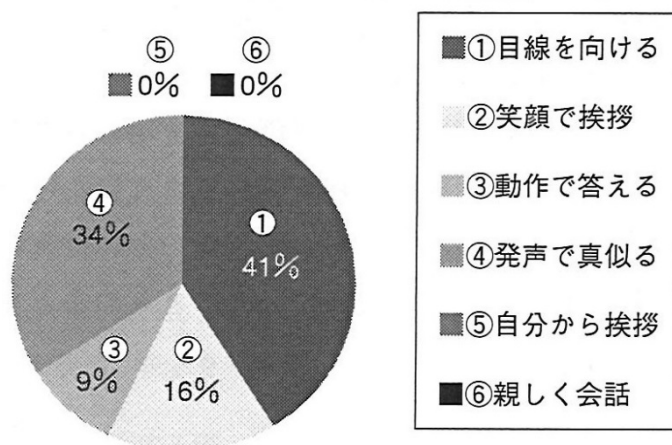
① 総括的データから

スモールステップアップを図る評価項目を用いて、4月、6月、10月の3回、全ての子どもについて調査が行われた。ここでは、その結果について考察を加える。

グラフ1は、入園間もない3歳児119名の状況である。新しい環境に対して緊張感があるからか、「おはよう」と声を掛けても真似てあいさつする第4段階の子は、三分の一にとどまっている。これらの子どもは、「あいさつ」というものがあるということを知り始めている状態であろうか。もちろん、第5段階以上の自分からあいさつをする子はいない。

これに対して、残りの三分の二の子どもたちは、保育士の声掛けに対して、目線を向ける表情で返す、動作で返すのが精一杯の状態、発話はない。推進委員会が書いた今後の取

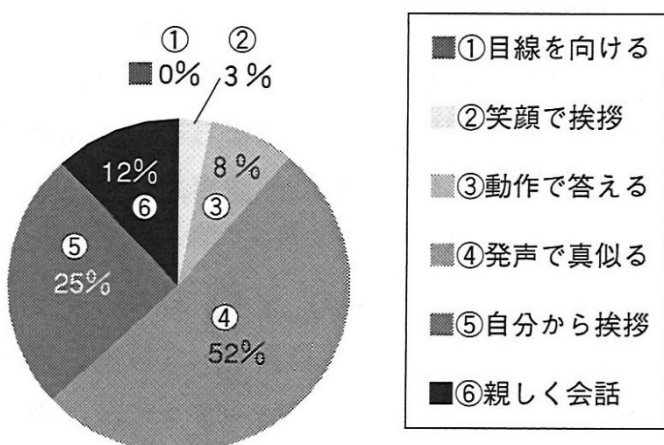
グラフ1 「朝のあいさつ3歳児」 4月



組みの欄には、「子どもが人との関係を深められるように、保育士の方から積極的にいろいろな表現で親しみを伝える」ことが手立てとして述べられている。

10月の調査では、第1段階はいなくなり、表情で返す、動作で返す子が約1割、真似て発声する子が約半数、残りの37%は自分から進んで部屋に入り、あいさつをするようになっている。そして、全体の12%は、保育士や友だちと楽しげに会話するようにもなるのである。子どもたちの順調な成長ぶりが、この総括的データから読み取ることができる。

グラフ2 「朝のあいさつ3歳児」 10月



このような総括データは、各年齢、各項目、調査ごとに作成され、考察と今後の取り組みが加えられている。同様に、例えば1歳児「かばんの中の持ち物始末」では、4月に

は49名全ての園児が、かばんを保護者に持ってもらって登園し、片付けも保護者がする状態であったのに、6月には保護者に持ってもらう子は約半数に減っている。10月には持ってもらう子は6%、それ以外の子どもたちは自分でかばんを持って登園し、57%は保育士

の援助を受けながら、37%は周囲を確認しながらも自力で片付けができるようになっていっているのである。評価項目を用いることで、子どもの驚異的な成長過程が、かなり明確にとらえられるようになったと言えよう。また、保育士にとっては自分の担任する子どもが同年齢のどの位置にいるかをつかむ相対評価の資料ともなる。より確かに一人一人の子どもの成長を意識することになるであろう。

② 個別データの活用

このような子どもの成長は、もちろん子どもに内在する能力の発揮なのであるが、スモールステップアップ評価項目によって現在の子どもの状況を知り、次の課題を明確に意識した保育士や保護者が、その能力を引き出そうと働きかけたことも見逃してはならない。調査のたびごとに担任保育士によって書かれた子どもごとの「配慮事項のカード」のいくつかを試してみることにする。

このカードのよい点は、まず、現在の子どもの状況が何段階にあるかを上の欄に書き、続いて今後目指すべき段階を次の欄に書き込むようにしていることである。

次に示す表（配慮事項カード1）では、現在はお辞儀をする動作で応えている子どもに、次の段階では発声させるようにすることを目標としているので具体的でわかりやすい。これが、もし目指す評価の項目にゴールとする目標を書いてしまうと、経験の少ない保育士は何

〈配慮事項カード1〉 子どもの目線で環境の見直しを図った事例（3歳児）

項目	朝のあいさつ
10月の評価項目(番号)	(3) 保育士が言葉をかけると、お辞儀をするなど動作で応える。
目指す評価項目(番号)	(4) 保育士が言葉をかけると、同じように発声で応じる。
評価を上げるための保育士の配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの目線に立ち環境の見直しをする。 ・動線や視線、視界を考慮し、入り口のドアの開き部分を反対にする。 ・保育室に入室する際、保育士の姿が1番に見えるよう環境を整える。 ・安心して入室できるよう、いつも同じ場所で迎え受け入れる。
考察	<ul style="list-style-type: none"> ・入室する際、1番に保育士の姿が見えるので他に気をとられることなく保育士とのやりとりや挨拶がしやすくなった。 ・友だちのしていることに興味を持ちやすく、気が散漫になりやすいので視線や動線を考え環境を見直ししたのが良かったと思われる。

をしたらよいかわからなくなってしまうだろう。

この表から保育士は、なぜこの子が発声しないのかを考え、その子が部屋に入って保育士とあいさつを交わす場面で、様々な状況が一举にその子の視野に入り、注意が散

漫になるのだと予想したことがわかる。そして、子どもの動線や視線の高さを考慮し、入口

では極力保育士だけが目に入るよう入口を変え、毎朝の保育士の立ち位置を固定化させていく。これが、この子に発声させることにつながっていくのである。細やかな手立てが、ステップアップを成功させた事例と言える。

その次に示した表（配慮事項カード2）は、「朝のあいさつ」の最終段階に到達しようとしている5歳児の事例である。保護者に協力を求め、保護者と保育士とが毎朝あいさつを交わして和やかに会話する場面をモデルとしてその子たちに見せている。子どもは、保育園だけでなく家庭でも家族からあいさつの仕方を教えられる機会をもつようになり、加えて、あいさつをクラスや保育園の朝の日常風景にすることも成功している。

〈配慮事項カード2〉 保育士や保護者が、子どもに手本を示した事例（5歳児）

項目	朝のあいさつ
6月の評価項目(番号)	(5) 自分から挨拶をしてクラスに入る。
目指す評価の項目(番号)	(6) 自分から挨拶をしてクラスに入り、友達や保育士と楽しく会話をする。
評価を上げるための保育士の配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> ・玄関に保育士が立ち、クラスに入る時だけでなく、登園してきた際に挨拶をしたり声をかけたりするように配慮した。 ・朝の挨拶だけでなく帰りの挨拶の仕方についてもクラスだよりで知らせ保護者にも挨拶についての関心が持てるよう配慮した。
考察	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者に知らせ保育士から挨拶をすることで、ほとんどの子どもが自分から挨拶をして入ってくるようになった。朝だけでなく、帰りの挨拶についても意識してするようになってきている。年長児なので園外へ出での活動や、色々な人と接する機会が多くなるので、その場に応じた挨拶が自分からできるよう知らせていきたい。

ところで配慮事項カードは、単にその子だけの成長記録個表として利用されているのではない。各保育園の実践で、様々なスモールステップアップの方法が試され、

同じ段階をクリアしていく時にも、その子によって、また保育士によって何通りもの方策が生まれている。そこで、推進委員がその手立てをこの書式カードで収集し、データとして各保育園に一斉に配信することによって、全ての保育士が利用可能なカードとなっていく。つまり、カードによる保育技術の共有化ツールともなったのである。これも、スモールステップアップ評価項目活用の成果とあってよい。

③ 「気になる子」の発見

子ども一人一人の成長過程をとらえることによって、「気になる子」もクローズアップされてくる。例えば、次に示す表2は、スモールステップアップ評価項目のクラス集計表の一

部であるが、「朝のあいさつ」では、A児、B児が順調にステップアップしているのに、C児は、6月はステップアップしたのに、10月にはダウンするという他の子には見られない

表2 スモールステップアップを図るためのチェック表（5歳児）
4月・・・● 6月・・・○ 10月・・・■

項目	目指す子どもの姿	児童名				
		チェック項目				
		A児	B児	C児		
●クラスに入る。 ※自分から挨拶をしてクラスに入る。	◎親しみを込めて、ことばとしぐさで挨拶をする。 ◎簡単な報告をしたり、出来事に触れ、親しみを深める。	*朝の挨拶	1 保育士が言葉をかけると、視線を向ける。	●		●
			2 保育士が言葉をかけると、笑顔を返すなど表情で応えようとする。			■
			3 保育士が言葉をかけると、お辞儀をするなど動作で応える。		●	
			4 保育士が言葉をかけると、同じように発声で応じる。	○	○	○
			5 自分から挨拶をしてクラスに入る。	○	○	
			6 自分から挨拶をしてクラスに入り、保育士や友だちと楽しく会話をする。	■	■	
●所持品の始末 ・歯ブラシ ・コップ ・タオル ・エプロン ・おしぼりなど	◎始末の仕方を知り、生活の場を整えながら、見通しを持って行動する。	*かばんの中の持ち物	3 保育士が言葉をかけながら片付けるのを、見たり聞いたりする。	●○		●
			4 自分で持って登園し、保育士の介助を受けて片付ける。	■		○■
			5 保育士が言葉をかけると、自分で片付ける。			
			7 保育士の見守りの中で、自分で片付ける。		●	
			8 まわりの様子を見て気付き、自分で片付ける。			
			9 進んで自分で片付ける。		○■	

結果となった。同様に、「かばんの中の持ち物の始末」では、B児が6月には第9段階の「進んで片付けできる」ようになってきているのに、A児とC児は第3段階、第4段階で停滞し、保育士の介助（保育士が

子どもの手を持って片付けを一緒に行う状態）が続いている。

これに対して、A児の担当保育士は注意深く記録をとり、配慮事項カードにまとめている。（配慮事項カード3参照）この中には、「集中力の持続性がなく、気持ちが散ってしまう」「感情の起伏が激しく、気に入らないと乱暴な行動をする」という問題状況だけでなく、「落ち着くと話が聞ける」ことや「時計にこだわりが強い」など、今後の指導に役立つようなポイントも書かれている。しかし、「昨日できたから、今日もうまくいくとは限らない」、保育士として新たな「かかわるテクニック」の習得が必要だとも書き、指導の困難性も述べている。

C児もよく似た状況が報告されている。朝、母親と登園するが登園時刻が遅い。母親にべったり甘えて離れられない日、不機嫌でピリピリした日、にこやかに話しかけてくる日など、喜怒哀楽が激しい。登園時の気持ちを長く引きずり、不安定な日は衝動的で乱暴な行動

〈配慮事項カード3〉 スモールステップアップを図るための保育士の配慮事項

項目	●所持品の始末 *かばんの中の持ち物
A児の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・6月から所持品の始末の動線を決め、1番〇〇 2番〇〇と絵カードを示し知らせしてきたが、スムーズにできる日と、レゴやブロック遊びに気持ちが行ってしまい、保育士の促しをなかなか聞き入れない日がある。 ・二度ほど促すと、腹を立ててそばのおもちゃ箱をひっくり返したり、友だちを叩いたりする。 ・気持ちが落ち着いたときに、じっくり話を聞いたり行動を振り返ったりすると、素直に道理を理解し行動を反省できる。 ・頭から自分を否定されると、スムーズに行動できない。
10月の評価項目	(4) 自分で持って登園し、保育士の介助を受けて片付ける。
目指す評価項目	(5) 保育士が言葉をかけると、自分で片付ける。
評価を上げるための保育士の配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> ・かばんをかけたままフラフラし、自分の気の向くままに行動しているので、手作りの時計を使って、時間内に片付けることを知らせる。 ・手作りの時計は、本児が登園してきた時に「長い針いくつまでに片付け終わる？」と尋ね、自分で時間を決めて始末できるように、励まし応援していく。 ・時計は見やすい所に貼っておく。
考 察	<ul style="list-style-type: none"> ・時間に対するこだわりが強い本児の性格と、片付ける時間の決定権を自分が持っていることが、絵カードよりも効果的であり、早く片付けられる日が増えてきたと思われる。 ・1分でも針がずれていると、パニックになることがあるので、分刻みまで設定できる時計の改善が必要である。 ・昨日出来たから、今日もうまくいくとは限らない。今、良かったやり方でも次にやってみると逆効果な時もある。本児の心の動きや行動をきちんととらえ、かかわるテクニクを習得する必要がある。

が目立つ。そしてほとんど何もできなくなるなどである。C児担当の保育士も、保育の難しさを述べている。

このように保育士が手探り状態になってしまうと、成長のための新たな手立てが準備できなくなる。それは、成長を保障できなくなることでもある。これを放置せず、保育園全体で取り組むよう支援体制を整えること、必要に応じて

関係機関の援助を受け保育士の専門的な力量を高めること、保護者の理解を得て協力体制をとることなどが必要になる。これは、基本的には園長の仕事である。

④ 行政等の保育支援

A市では、平成18年度から保育園の入所にあたって「合同観察」を取り入れている。従来、障害のある子どもに加配の保育士を配置するには、障害者手帳や医師による診断書の提出が求められていた。しかし、これらを取得し提出する保護者は少なく、加配保育士の人数は限定的な状況であった。そこで保護者が了解した子どもに対し、合同観察を開催して、第三者の専門家で構成するチームが保育観察を行うようにした。そして、その助言をもとにしてA市では加配保育士をつけるようにしたのである。平成20年以降では、保育園等巡回訪

問も行われるようになり、特別支援教育に対する保護者の理解も徐々に深まって、子どもに
加配保育士をつけ、少しでも充実した保育サービスが受けられるよう求める保護者が増えて
きている。(表3参照)

表3 A市における加配保育士数の変化

年度	保育園数	障害児保育実施園	入所要観察児数	加配保育士数	備考
16	22園 (公17私5)	1園 (公立1)	1名	1名	
17	22園 (公17私5)	1園 (公立1)	2名	2名	
18	20園 (公15私5)	1園 (公立1)	3名	2名	合同観察の 実施
19	20園 (公14私6)	7園 (公立4私立3)	14名	8名	
20	19園 (公12私7)	8園 (公立4私立4)	11名	8名	保育園等 巡回訪問実施
21	17園 (公9私8)	13園 (公立7私立6)	20名	13名	

子どもの成長を保障す
るとは、このように保護
者、保育士、行政がそれ
ぞれの立場で役割を果た
し、子どもが継続的に質
の高い保育サービスを受
けられるようにするとい
うことである。そのため
には、本実践で取り上げ

たスモールステップアップ評価項目の活用のように、客観的なデータが欠かせない。データ
を参考に、子どもたち一人一人をかけがえのない存在として育てて来た保護者や保育士にと
って、小学校入学後も一人一人の成長が保障される教育が受けられるように願うのは、当然
のことである。子ども一人一人の特性だけでなく、成長過程や援助等の手立ても含めて、A
市保育士会は小学校につなごうと考えたのである。

2 A市立の保育園と小学校との接続に向けて

(1) 幼保小接続への契機

幼保小接続の実現にむかって、単独の保育園や小学校で取り組むには困難が大きい。それ
は例えば、各保育園、各小学校には個別的な様々な事情があること、また、園長、校長等の
管理職がその学校園を管理している期間があまり長くなく、幼保小接続に対する関心も必ず
しも高いわけではないので、安定した幼保小接続を実現する障害になるからである。また、
保育園は子育て支援課、小学校は教育委員会と所管が違っており、そのことも保育園と小学
校との連携や接続を難しくしていると言えよう。

A市で幼保小接続の具体的な動きが見え始めたのは、平成27年度年度の春からである。
スモールステップアップを生かし、特別なニーズをもつ子どもの早期発見、合同観察を通し
ての加配を始めてから、約10年もの年月を経ている。

幼保小接続への契機になったのは、平成27年4月、A市子育て支援課の保育園担当によ
る同市の教育センターへの訪問である。そこでは、保育園担当から教育センター所長に対
し、これまでのスモールステップアップ実践の成果の説明と、特別なニーズをもつ子どもの
小学校進学に関する話合いが行われた。教育センターが特に興味をもったのは、特別なニー

ズをもつ子どもへの指導や援助の方法であった。小学校一年生担任は、入学してきた様々な個性をもつ子どもたちに対して、どのような指導が有効であるのかを探り当てるのに相当な時間を要する。特に特別なニーズをもつ子どもに対しては、かなりの注意力を払い、労力がかかることとなる。また、その指導や援助の成否が、場合によっては学級づくりにも大きな影響を与えることがある。幼保小接続の取り組みによって保育園等からそのノウハウを引き継ぐことができれば、担任が手探りで有効な指導法を手に入れようとする時間を短縮でき、子どもにとっても担任にとっても接続期の負担を軽減できるからであろう。

その場で話し合われ、合意を得られた内容は、次の2点である。

ア、モデル事業として、隣接する保育園と小学校とを指定し、先行的な取り組みを行う。
イ、保育士は、小学校入学後の状況が分からない、小学校教員は、保育園での子どもの育ちを知らないので、保育士と小学校教員とが話し合う、体験するなどの機会を増やし相互の理解を推進するようにする。

話合いの時期が年度初めの4月であることから、この企画には実はかなりの無理があった。例えば、隣接する一組の保育園と小学校とを幼保小接続のための指定校・園としても、これを推進する予算がないことである。次年度予算案は、前年度の秋に市議会に提出され、すでに議決されていた。同様に、市教育委員会が実施する事業についても、前年度末には小学校長会に提案され、了承されていた。年度初めに新たな企画を入れることは、校長会は抵抗する可能性があった。

4月末、指定校・園として想定していた小学校と保育園を教育センターと子育て支援課が訪問し、校長に了解を得た。また、子育て支援課は、教育センターに働きかけ、これまでの研修体制を改め、年長児を担当する保育士と、小学校1年生を担当する教員とが参加する年3回の「幼保小接続研修会」の立ち上げに成功している。

(3) 隣接する保育園、小学校の交流から、幼保小接続研修会へ

市立保育園及び市立小学校は、基本的には地域ごとに設置されているので、距離が近く交流に都合がよい立地となっている。従来から、小学校の運動会、学校祭などには、保育園児が招待され、また、演技等に参加することも珍しくなかった。しかし、それらは1年に一回といった限定的な交流であり、継続的な交流となっていなかった。また、保育園から小学校への進学にあたっては、3月末に保育園の年長児担任と小学校教員との引き継ぎに関する場が設けられ、一人一人の子どもについての情報が小学校に伝えられていた。しかし、その引き継ぎは、必ずしも次年度1年の担任ではない教員に対して行われており、場合によっては

卒業生を送り出して手の空いた6年担任であったりして、有効な引き継ぎとまらないという意見も聞かれた。さらに、幼保小の接続にあたって、保育士からは、「入学後の子どもたちの生活について知りたい」「小学校の先生が、どのように子どもたちを指導しているのか知りたい」などの要望が子育て支援課に出されていた。

これらのことから、幼保小接続にあたってはまず、保育士、教員といった教師たち側の相互理解が必要であると考えた。そこで、子育て支援課からは、各保育園に対して次のような指示が出されている。

- ① 進学する子どもの引き継ぎについては、3月末に1回目を、4月末を目処に2回目の引き継ぎを行う。その際、保育園側から小学校に出かけるのは、前年度年長を担任した保育士とする。その保育士が異動している場合でも子どもたちの進学している小学校に出かけることとし、出かけている間は、当該保育士の補充として非常勤の保育士を当該保育園に派遣する。
- ② 保育士が小学校の指導について理解を深めたいときは、小学校に依頼して授業参観をさせてもらうよりは、スタディメイト（教育補助員）として授業に参加し、担任と協働することにより学習内容や教員の指導等について理解を深める。

このような保育士の理解を深める園側から小学校への働きかけだけではなく、小学校教員の保育園理解のための機会も設けられた。それが、幼保小接続研修会第2回（8月初頭に開催）の内容である。8月は、小学校が夏休みとなり教員が研修に動きやすい時期である。そこで、モデル事業で指定園となった保育園では、登園の時刻から保育園を開放し、保育活動を公開するとともに、参観者（小学校教員）と保育士との意見交換、参観者、園児、保育士を交えた給食などが行われた。この日は、午後は特別支援に関する講演会も実施されており、保育士、小学校教員も参加して理解を深める機会となっている。

参加した保育士、小学校教員らは、次のような感想を残している。（番号及び下線は、筆者）

所属	〇〇の教室	氏名	
----	-------	----	--

○ 身の回りのことを①自分でできるように工夫されていて、子供達が②自分からやってみたときに成功体験につながると感じた。保育士と子供との関係がよく、子供が先生のことを意識して安心して過ごしていることが伺えた。安心して自信を持って就学に向かう心の準備が大切だと感じた。

所属	□□保育園	氏名	
----	-------	----	--

○ 自由遊びやお化け屋敷についての話し合いの中で、③子供達の自主性を感じることができました。④収穫した野菜を数えたり、⑤保育士との会話だったり、生活、遊びの中にあることを改めて感じたと共に、小学校への接続を考えた環境設定、保育士の関わりがあり参考にさせていた

だきたいと思いました。

所 属	△△保育園	氏 名	
-----	-------	-----	--

○ 日頃から先生方同士の意見交換はとても重要だと思いました。「できた」「できない」ではなく、⑥自分の思いを素直に言える子、⑦意欲につながるよう日々子供達と生活していきたいと思います。取り入れられるところ、つなげていけるところを見つけ実践を大切にしていきたいです。

所 属	〇〇保育園	氏 名	
-----	-------	-----	--

○ 円滑な接続にするための工夫が沢山なされていてとても参考になった保育公開でした。また、子供達がとても**のびのびとイキイキと生活している姿**を見て、よい環境の中で過ごしているのだと思いました。沢山の人がいる中でも、堂々と発表する姿を見て、⑧経験することの大切さや認められることの大切さに改めて気づかされました。今回の保育公開を参考に、自分の保育を見つめなおしていきたいと思いました。

※ ①②では、「自分で」や「自分から」という言葉が入っており、子どもの自主的な動きやそれから生まれる自信、自己肯定感に目が向けられている。参観者は特別支援にかかわっており、子どもの自立に向けての動きを特にとらえようとしたのではないか。③では、自主性という言葉が見えており、さらに④数を数える、⑤会話するなど知的な活動が日常の活動に組み込まれていることに着目している。これらの実践の様子から⑥⑦では「自分の思いを素直に言える」、「意欲につながる」など、子どもの意欲や内面の変化を取り上げ、自身の実践の改善に向かおうとしている。⑧では、「経験すること」「認められること」の大切さが指摘されており、「改めて」という言葉から、知ってはいたけれど子どもの姿から、再度、学び直しが起こったことを述べている。

所 属	□□小学校	氏 名	
-----	-------	-----	--

○ ⑨自分で考えて行動しているのが、すばらしいと思った。「自主・自立」というものを小学校でも大切にしているため、先生が言ってからではなく、⑩自発的に行動することはこの先にもつながると思うので、良い取り組みであると思った。晴れている日は外で遊ぶ姿も良いと思った。⑪時間を意識して生活している姿も小学校生活で大切になるので、すばらしいと思った。私ももっと時間を意識して子供と関わっていきたい。

所 属	△△小学校	氏 名	
-----	-------	-----	--

○ 子供達の遊びの様子を見て、自分の好きな遊びを通して子供達同士が関わり合っている様子がよく分かりました。友達や先生方と温かく関わりながら成長しているのがとても分かりました。

心の成長につながる。

- 並ぶ、ルールを守る、姿勢、発表の仕方をよく身につけている。
- 自分の考えをしっかりと持っている。
- みんなの前で発表している。
- 縦割り活動のよさがよく分かった。 → ○ 他組の子(年下)のことを考えて活動に誘おうとしているのがよかった。⑫優しい心・思いやりの心が育っている。学校生活を送る上で、とても大切なことである。

所 属	〇〇小学校	氏 名	
-----	-------	-----	--

- ⑬数字にふれる機会を上手に作っていて良かった。
- 園長先生をはじめ先生方の関わり方がすごく良かった。
- 小さい子を思いやる場面があって素敵でした。
- 日直の仕事を進んでやっていた。⑭たくさんの役割を与えているのが良かった。

所 属	××小学校	氏 名	
-----	-------	-----	--

○ 幼稚園、保育園の先生のように笑顔で明るく、⑮感情を共感することが必要だと感じました。⑯幼保のような安心感を、子供たちが持てるよう工夫していきたい。また、◇◇保育園の園長先生の「少しずつ」という言葉も心に残った。一人一人の子供が何を考えているのかな、何をした

いのかなと考えて必要な支援ができるようになりたい。

所 属	◇◇小学校	氏 名	
-----	-------	-----	--

○子供達が⑰自分の力で解決できるような支援が沢山あり、とても勉強になりました。教室環境は、⑱子供の目線で様々な物が用意されているなど感じました。ぬり絵や三つ編みのコーナーには子供の動線を考えた道具の配置があり、また、子供がひらがなや数字に興味を持てるように様々な場所に先生の⑲やわらかな言葉がちりばめられていました。子供達が安心して様々なことに取り組めるような配慮が見られ、ぜひ参考にさせていただきたいと思いました。また、係の当番活動等、一人一人が役割や出番を持つ機会がたくさんあり、小学校でも自信を持って様々な活動に取り組めるのではないかと感じました。

所 属	▽▽小学校	氏 名	
-----	-------	-----	--

○ ⑳活動が自分ごととなっていました。授業では事前にお化け廊下を作り、お化けの絵本を読む、お化けの歌を歌うなど。昨年のお祭りが子供の実態に合わなかったという反省が生かされて、子供のイメージがふくらんで活動ができるようになっていました。当番では数を数えているだけでなく、自分達の育てた野菜を当番の子がじっくりと先生と一緒に調べていました。表現の仕方は様々ですが、㉑10のまとまりを大シールにして表現するのは小学校でも活用させていただきたいです。

○ 自分の思いや意見を言葉にして伝えることができるようになることについて㉒理由を考えているのが素敵でした。

<話し合いの活動> 先生の質問の仕方子供達が深まりました。

T:どこでしますか？

C:メロン組の廊下

T:お便所行ける？パンダさん行ける？

C:入り口にかわいいおばけつける！

表現しようとしな(ように見える)子について、

今日は大人が多い中での話し合いで緊張させました。小学校で指導することを考えるならば、全体の話し合いの前に(途中)おしゃべり(ペア対話)を入れていきたいと思いました。本日はありがとうございます。子供の実態をよく見て展開されていることの大切さを教わりました。

先生の質問や友達の見聞を聞きながら思考を深めていく姿がありました。

所 属	◆◆小学校	氏 名	
-----	-------	-----	--

○ 昨年も感じたことですが、子供たちがとても落ち着いて安心して活動に取り組んでいたところがすばらしいと感じました。また、自由保育の良さが十分に生かされていた。自由保育の時間を生かして、担任の㉓先生が子供たちに個別にじっくり関わることができていた。(野菜取りの当番さんに対して担任の先生が関わった場面個別に数の数え方、数字の書き方、シールの貼り方、片づけ方など教えることができる)これを輪番制にすることで、すべての子供に個別に関わる機会が生まれていると思います。

○ 環境面 カード、写真等を上手に活用して、子供達が自然に時計や文字に触れ、身につけることができるようになっている。時計カード、日直カード、今日の予定、歌の歌詞カード

○ 園庭、藤棚の下の砂場、豊富な花壇の花、すぐそばに鉄棒の登り棒などの遊具がある良さなど、㉔保育士の目のとどく範囲で自由に思い切り遊ぶことができる環境が用意されていた。(道具や小プールなどの準備も整えられている)

○ 保育園の先生方が昨年、また6月の幼保小連絡会での話し合いを生かして、園で工夫して取り組んで下さっていることを本当にありがたううれしく思いました。これからも連絡を取りながら、発達段階に応じて双方でできることを子供達のためにしていけたらよいと思いました。

所 属	大学生	氏 名	
-----	-----	-----	--

○ 私はこれから現場に出る立場なのですが、大変勉強になることばかりでした。◇◇保育園は、㉕小学校への接続がすごく意識され、子供一人一人に向き合い、じっくりゆっくり育てている場

所なのだと感じました。また、このような機会があればぜひ参加させていただきたいです。

※ 一方、参観した小学校教員の反応は、次のようである。

⑨⑩では、「自分で考えて」や「自発的」といった、保育士と同様な指摘をしているが、さらに⑪「時間を意識して」と書き、授業時間といった小学校の生活との関連が述べられている。⑫では「やさしい心、思いやり」などの他者との関係に配慮する内面の動きをとらえ、それが小学校生活にも有効であることを述べる。⑬では、「数字にふれる機会」を挙げ、小学校の教科指導につながる内容を指摘する。さらに⑭「たくさんの役割をあたえている」とも述べている。おそらく小学校低学年児童と比べて、保育園の子どもたちの経験する内容が多いのであろう。それは、子どもの能力への信頼であり、小学校教員には、自らの実践への振り返りが起こっているのかもしれない。

⑮では、「感情を共感する」⑯では「安心感」といった保育士の子どもに対する配慮や環境作りをとらえている。おそらく自分の教室、あるいは学校の雰囲気との比較が起こっているのだろう。振り返りの表現としてとらえられる。⑰では「自分の力で解決できる」⑱は「子どもの目線」、⑲では「ひらがなや数字」を取り上げ、そこへの興味を喚起する「やわらかな言葉」という、この教諭特有の表現がなされている。つまり、子どもの活動に注目すると保育士が予想し準備する活動が適切であると気付き、それは保育士の見方が、より子どもに近いのであり、それは小学校教員に比べてやわらかなのであろう。

⑳では活動が「自分ごと」になっていて、やらされている訳ではないこと、また、㉑数の学習では、シールの活用にも着目している。㉒では「理由」という言葉が出ている。これは小学校でも課題として感じているからであろうか。㉓では保育士と子どもとのかかわりに「じっくり」という言葉が使われ、㉔では「保育士の目の届く範囲で」と述べて、目配りと活動の広がりなどに注目している。

最後に取り上げた大学生は、初めて保育園を参観し、その感動を述べている。㉕には「小学校への接続」だけでなく、子どもの成長についても「じっくり」「ゆっくり」など、小学校との違いを表現している。

(4) 幼保小接続研修会の変化

子育て支援課、教育センターという所管の違う組織が連携し、保育士、幼稚園教諭や小学校教員が集まって行う「幼保小接続研修会」が立ち上げられても、しばらくの間は、有効な研修会とはならないように見えた。小学校は保育園、幼稚園等への理解が十分でなく、同様に保育士や幼稚園教諭には、小学校の授業等に対する理解がなかったからである。だから、研修の大半は、話し合いというより互いの知らないことを質問し合う時間になった。このような状況が大きく変化する契機となったのは、「段差」の検討を始めてからである。

一つの段差の例として、給食がある。小学校に入学して間もなく、小学校から、子どもたちが給食を食べきれない、あるいは残食がでるといった報告がなされた。保育士にとって、それはとても不思議なことであった。なぜなら、保育園では毎日子どもたちは給食を完食していたのであり、完食までの時間もそんなに長いものではなかったからである。いろいろ検討する内に「牛乳」が話題に上った。小学校では給食時に牛乳も出される。小学校中・高学年では問題にならない牛乳が、低学年、特に1年生では大きな負担になっていた。つまり、牛乳を飲むとお腹がいっぱいになって、ご飯やおかずが食べられなくなるのである。そこ

で、ある学校では、牛乳を午前中の長休みや、帰宅前にのませるよう試してみた。そのことで、1年生も給食を残さず食べられるようになったのである。「段差」の具体は、例えばこのようなものである。もう一つ、A市の公立保育園は、全てが平屋建てである。小学校の全ては、鉄筋コンクリート2階建て以上であり、階段がある。小学校入学したての子どもにとって、階段も昇降するのに脚力のいる危険な場所であり、移動に困るところである。トイレも便器の大きさ、形状が保育園とは違っており1年生にとっては使いにくい状況である。

「1年生がトイレを汚してしまう」という声は、小学校ではよく聞かれるが、それは子どもに責任があるのではなく、子どもの体位に合わない便器が設置されていことの方に原因があるといってもよい。

環境の違い、段差に気づいた保育士、教員たちが作成した接続シートを巻末に添付した。そこには、保育士や教員が知りたい内容順にチェック項目が示されていると考える。つまり、A市の保育士、教員たちが最も知りたいのは、その子の基本的な生活習慣の定着度であり、次いで身体状況であり傾聴する力である。だから、数や文字、コミュニケーションなどはその後になっている。例えば小学校教員が基本的な生活習慣の定着状況を気にするのは、学級集団という単位で活動ができるかどうかを知りたいからである。もし、援助が必要な子がいる場合は、学習環境の整備、人的援助など様々な整備が必要となる。どのように環境を整備しても、現在の状況を見る限り、担任がその子にかかる労力が大きく、他の子への援助や指導にかかる労力が小さくなるといったことは、起こりやすいことである。

まとめに代えて

(1) 研究成果の概要

本研究は、幼保小接続がどのように推進されていくのかに関する事例研究である。特に特別なニーズをもつ子をいかに早く発見しその子に合った支援体制を作り上げるかは、子どもの成長に大きく影響すると考えられる。そこで、研究対象とした保育士会は、基本的な生活習慣の定着に目を向け、その定着状況をとらえるためのスモールステップ評価表を作成した。なぜ、基本的な生活習慣なのかといえば、それはその子たちを指導・援助する保育士、小学校教員等が最も知りたい情報であり、また、デイリープログラムの中から評価する活動を選ぶので、個々の子ども、個々の保育士等によって見方が大きくぶれることがないからである。

成果として、スモールステップを作成し活用する保育士等の見とり能力の伸長、ステップを一つ一つ上っていけるようにするための保育士の指導・援助方法の獲得、特別なニーズをもつ子どもの早期発見と、合同観察と合わせて取り組むことにより、加配保育士の配置なども可能となった。

(2) 研究成果の発表状況

この研究の成果は、平成 29 年 8 月 5 日（土曜日）に上越教育大学で開催された「日本学校教育学会第 32 回研究大会」で発表した。テーマは『教員や保育士等、実践側のニーズを踏まえた幼保小接続の試み』であり、自由研究発表である。発表者は瀬戸 健（上越教育大学）と坂本 正子（氷見市子育て支援課主査）である。

(3) 学校現場や授業への研究成果の還元について

平成 27 年度より、氷見市立保育園および同市立小学校を対象とした幼保小接続研修会にアドバイザーとして瀬戸が継続的に参加している。その際、各保育園と小学校で行っている取り組みの評価や効果についてフィードバックした。また、大学院の授業では、新学習指導要領の解説の中で、学習指導要領が目指す接続が、知的成長の接続にあるのにたいし、本事例は、保育士、教員のニーズと合致していることなどを説明した。

(4) 今後予定している研究の継続について

本研究は、科学研究費補助金による研究として、下記のテーマで継続される。研究成果については、平成 30 年 5 月に開催される幼児教育学会で、瀬戸、阿部、堀井らによって中間発表を予定している。

科学研究費助成事業（学術研究助成金女性基金）基盤 C

課題番号 17K04611（研究代表者 瀬戸健）

課題研究名『教員や保育士等、実践側のニーズを踏まえた幼保小接続に関する意思決定過程の研究』（平成 29 年～31 年）

【参考文献】

- ・ 厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課『改訂保育所保育指針研修会テキスト』
- ・ 民秋言編著『新保育所保育指針の展開』建帛社 2009
- ・ 福山市・福山市保育連盟『福山市保育カリキュラム』2008
- ・ 一前春子「幼稚園から小学校への移行期に関する研究」共立女子短期大学紀要 54 号 pp15-26 2011

取扱い注意

平成 年度

氷見市就学接続シート

小学校 (担当:)
 保育園 (担当:)
 認定こども園 (担当:)

園名	名前	性別	男・女		
該当するものに○を、特記すべき事項があれば()に記入してください。					
健康・日常生活	1	健康面	(1) 健康 (2) 健康に配慮を要する (食物アレルギーなど) (小麦・卵・そば・カニ・エビ)		
	2	生活リズム	(1) 遅刻が多い (2) 欠席が多い (3) 登園をしぶる(
	3	挨拶	(1) ひとりでできる (2) 支援を要する (
	4	所持品の始末 (登園・降園準備)	(1) ひとりでできる (2) 1人でできるが時間がかかる (3) 支援を要する (例:)		
	5	片付け	(1) ひとりでできる (2) 1人でできるが時間がかかる (3) 支援を要する (例:)		
	6	着脱	(1) ひとりでできる (2) 1人でできるが時間がかかる (3) 支援を要する (例:)		
	7	食事	内容	(1) 偏食はない (2) 偏食がある (例:)	
			量	(1) 小食 (2) ふつう (3) 大食	
			時間	(1) 遅い (2) ふつう (3) 早い	
マナー			(1) 良い (2) ふつう (3) 悪い(
8	排泄	(1) ひとりでできる (2) 支援を要する (
9	配慮事項 (有効支援)				
活動の様子	10	身体の動き	(1) 特に気にならない (2) ぎこちなさがある ※気になる場面や場所 (例: 歩き方・走り方・スキップ・ボールの投げ方・縄跳びなどのどんな動き?)		
	11	手指の動き	(1) 特に気にならない (2) ぎこちなさがある (3) 筆圧が弱い ※気になる場面や動作(例: 出席シールの貼り方・箸の使い方・折り紙の折り方などのどんな動き?)		
	12	絵を描く (描き出すには)	(1) 好きなものが描ける (2) 手本を写すことができる (3) ○△□を描ける (4) なぐり描く (5) 描き始めに時間がかかる(・見守る・先生と話す・友達を見る)		
	13	平仮名の読み	(1) 50音全部読める (2) 少し(名前など)読める (3) 読めない		
	14	平仮名の書き (筆順は問わない)	(1) 50音全部書ける (2) 少し(名前など)書ける (3) 手本を見て書ける (4) なぞり書きならできる (5) 書けない		
	15	数唱	(1) 1人で間違えずに唱える (2) 1人で唱えるが間違える時がある (3) 支援を要する		
16	数の概念 (10までの数)	(1) 理解している (2) 理解していない			

活動の様子	17	発音・発語	(1) 特に気にならない (2) 発音に不明確な音がある 例: 幼児語: おちゃかな(・カ行・サ行・タ行) (3) 単語の言い間違えがある 例: 「とうもろこし」→「とうころもし」(例:) (4) 吃音 (5) 選択性緘黙(・ 自分の気持ちを伝える ・ 自分の気持ちを伝えられない)
	18	行動	(1) 気にならない (2) 強いこだわりがある (3) 感覚過敏がある (4) 多動・衝動性がある (5) パニックを起こす (6) 左右がわからない (7) 姿勢が保てない (8) 癖がある (具体的に:)
	19	配慮事項 (有効支援)	
人との関わり	20	関わる人	(1) 誰とでも (2) 特定の人 ()
	21	集団参加	(1) 参加できる (2) 支援があれば参加できる (3) 参加できない
	22	指示理解	(1) 一斉の指示で理解できる (2) 個別の指示があると理解できる (3) 個別でも理解しにくい
	23	コミュニケーション	(1) 誰とでも会話が成立する (2) 大人と1対1なら会話が成立する (3) 一方的に話をする (4) 質問されれば答える (5) 質問に対し関係のない返事をする
	24	配慮事項 (有効支援)	
○得意なこと・好きなこと			
○ 家族構成		○ 保護者への配慮事項 (保護者への対応・子どもへの理解度を含む)	
祖父 — 祖母 祖父 — 祖母 父 ————— 母 			
○ 関係機関などの利用状況 (なんでも相談・すくすく相談・ことばの教室・高岡市きずな子ども発達支援センター・氷見市地区相談会他)			
○ その他 伝えたいこと			